中津川市立苗木中学校 学校報　　学校教育目標・校訓「純・博・健」

苗 木 中 だ よ り

NO.１４
令和７年　８月２８日発行

～ 楽しくて「変な学校」が、また今日から始まる ～

校長　小木曽敏樹

４０日間の長い夏休みが終わり、今日からまた学校生活が再スタートしました。すぐに体育大会の取組が始まります。昨年の変更を上回る新しい体育大会になるかもしれません。全校で感動を共有できる、そんな最高の体育大会になることを期待しています。体育大会と並行して、後期の生徒会役員選挙が行われ、後期の組織決めへと向かいます。なりたい自分になるために、仲間と学校の成長のために、自分はどうするのかを考えます。その選択や決意によってその後の生き方が変わる人もいます。自分と正しく向き合い、自分自身と相談したらいい。組織決めと並行して、今度は合唱祭に向けての取組が本格化します。合唱自体は日々学級で、音楽で行っていますが、合唱祭という舞台に向けての取組になると、それぞれの想いや熱量の差が顕著に見え、心がすれ違うこともあるでしょう。そこから逃げずに乗り越えた時、最高の合唱になっていく。そんな最高の舞台を楽しみにしています。

冬休みまでは長いなぁ～と思っているかもしれませんが、やることがあり過ぎて時間が足りないくらいです。そんな忙しさが楽しいと感じられる、「変な学校」が、また今日から始まる。

また、楽しいことが始まる。

「暑い」夏に、それぞれの 「熱い」経験

夏休み中の前半には、中体連県大会が開催され、卓球女子は団体も個人も東濃優勝。あと１勝というところで東海大会出場は逃しましたが、３年Ｙさんが個人戦で東海大会に出場しました。クラブチームで東海大会に出場したのは、県大会２位の成績を収めたサッカーの３年Ｓさんと２年Ｓさんです。また野球では３年Mさん、女子野球で２年のＨさん、カヌーで２年のＴさんが、全国大会に出場。吹奏楽では２年Mさんが県大会で演奏し銀賞を受賞しました。それぞれが暑い夏に、熱い経験をしました。

また、３年のＮさん、２年のＹさんは、市の国際交流事業「タイ研修」に参加し、日本では味わうことのできない文化や人の暮らし、そして食を味わい、国際理解を深めてきました。

夏休み後半には、中津川市中学生生徒会サミットが開かれ、市内 12 校の生徒会執行部が熱い論議をして交流しました。学校紹介では、夏休み直前に撮影した全校ダンス動画を紹介し、市長さん、市議会議員さんはじめ、他校の生徒たちからも大絶賛の大きな拍手をいただきました。

この他にも、科学の甲子園、岐阜サマーサイエンススクール、英語スピーチコンテストに参加し、得意分野をさらに高め、自分を磨いた仲間たちがいます。

異常なくらいの「暑い」夏に、「熱い」経験をした皆さん。それぞれの「熱い」経験をこれからの生活に活かしていこう。そして、仲間にも伝えてほしい。頑張ることの楽しさを。

明日から、きっと毎日、楽しいことがある

夏休み中の８月１５日。８０回目の終戦記念日を迎えました。それに合わせて、テレビでは７年ぶりにアニメ作品「火垂るの墓」が放映されました。見ましたか？

「火垂るの墓」は作家、野坂昭如さんの半実体験に基づいた作品です。登場人物の節子さんは４歳、せいたさんは１４歳。今の君たちと同じ年齢です。戦時中は学徒動員といって、中学生以上は国のために軍需工場などで働いていました。特攻隊に志願できるのは１４歳からでした。沖縄戦では爆弾を抱えて走って戦車に突撃していく特攻隊として、１３歳の少年が戦死しています。

「火垂るの墓」のキャッチコピー、サブタイトルのようなものは、「４歳と１４歳で、生きようと思った」です。しかし、生き抜くことはできませんでした。戦争がこの２人の命を奪ったのかといえば、戦争だけではありません。社会が、世間が２人で生きていくことを許さなかったのです。

作者、野坂さんは、そしてこの映画の監督、高畑さんは、何を私たちに伝えたかったのでしょう。生きようとしたけれど、生きられなかった。必死に頑張ってみたけれど、生きられなかった。二人の命を奪ったものは何なのか。

３年生は、広島で学んだことや思ったこと、誓ったことを思い出してみよう。１・２年生は「生きたくても生きられなかった人々の気持ち」に、向き合ってみてほしい。「普通の死すら与えられなかった人々の悲しみ」に、向き合ってみてほしい。

８０年前の話ではあるけれど、今も他国では同じことが起きています。何の罪もない、幼い子どもたちの命が犠牲になっています。その日食べるものや水を求めて、人々がさまよっています。いつ襲ってくるか分からない死の瞬間におびえ、眠れない日々を過ごしています。「明日」ではなく、「今日」を、「今」を生きるために生きている人々が、世界中では数百万人もいます。食べたいときに食べ、眠りたいときに眠れる、やりたいことをやり、やりたくないことをやらなくても命を奪われることはない。生きることに必死にならなくても命をつないでいる私たちの今とは、真逆のような生活が世界の国々にはあるのです。

今、この平和な日本に生きていられるのは、８０年前に一生懸命に生きようとして、しかし、生きたくても生きられなかった、そんな方々の犠牲の上に成り立っているのだと思います。必死に生きようとした方々の想いを考えた時、今、私たちの目の前にある困難さや苦しみは、きっと大したことはないのだろうと思う。逃げ出したいと思うことも、実際にはきっと逃げ出す必要のないくらい小さなことなのだろう。

頑張って乗り切るか、耐えるか、楽をしてごまかすのか、適当にやりすごすか、人生の生き方は人によって違うし選ぶことができる。無理だと思ったら休めばいい。逃げればいい。自分の生き方を自分で選べばいい。しかし、戦時中にはその選択肢はなかった。生か、死か、その２つの選択だけ。辛いも悲しいも言っていられない。だから、生きるためだけに生きた。

そんな時代があったことさえ、忘れ去られそうな今だからこそ、私たちに与えられた「命」の尊さを今一度考え、「生きること」の意味を自分自身に問うてみたい。

あなたの「命」はかけがえのない大切な命であり、唯一無二の「命」。そして、その「命」は自分だけのものではなく、あなたの周りにいる人たちにとっても大切な「命」。その「命」に代わるものなどない。今、あなたが生きている、そこにいる。そのことが大切なこと。

明日から、きっと毎日、楽しいことがある。

人生には、出口のないトンネルはない。必ず明るい未来が待っている。